
Only now

я

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Only now

【Nコード】

N9266A

【作者名】

Я

【あらすじ】

スコールとリノアのある日の一時。ほのぼの感ありありの短編。

橙色に煌く太陽が丁度真上に位置する昼時。

バラムガーデンの生徒及び教師たちは皆昼食を取りに食堂へ向かう中、1人食堂から反対方向の駐車場へ向かう少女がいた。

長い艶やかな黒髪を靡かせ、少女・リノアは駐車場で仲間達の帰りを待っていた。

いつもならスコールの部屋で大人しく本でも読みながら帰りを待っているのだが、今日は先程スコールから珍しく任務先から電話があり、今日の任務は全て終わったので早く帰るといふなんとも嬉しい報せがあったのだ。

今日の任務はやや遠地ということもあり、スコールたちはトラックで任務へ向かっている。

だから誰よりも先に、駐車場でこうして帰りを待ちわびているのだ。

（まだかな・・・・・・）

ついさっきの連絡なので、当然すぐ帰ってくるはずもないが、それでも思ってしまう。

一刻も早く彼に会いたいと。

いつもなかなか一緒に入れない分、今日はたくさん彼に甘えるんだと。

すると、リノアの想いが届いたのか。

駐車場の入り口付近からトラックのエンジン音が聞こえてきた。

「！！」

リノアは急いでトラックに駆け寄り、エンジンが止まったことを確認し車体を軽くノックする。

するとキイツとドアを開く音がして、運転席から茶色の髪を払いながらスコールが出てきた。

「お帰りなさい!!」

満面の笑顔でスコールに言いながら思いっきり抱きついた。

スコールは少々途惑いながらも蒼の目を細め、リノアの華奢な体を抱き返し「ただいま。」と返事を返した。

「モーリノアもはんちょも、あたたちの存在忘れてるでしょお。」

「

2人の周囲を全く気にもしない様子に呆れながら、セルフイが助手席から出てきた。

「しょうがないよセフィ。いつも一緒にいれない2人の感動の再会だよ?そりゃあこんくらい堂々とみんなの前で抱き合うくらいしなきゃ。」

「ホント、よくまあ人目にせずにはイチャイチャできるよなあ。」

「ガーデン内では生徒の目の毒にならないようほどどにね?」

続いてアーヴァイン、ゼル、キスティスが後部座席から口々に言いながら出てくる。

「べ、別にイチャイチャなんてしてないでしょお!もお!」

顔を赤らめてムキになるリノアを見て、誰もが笑いを堪えた。

「んなムキになんなよ、本当の事なんだし。」

「言えてる言えてる。ハイ、そうと決まったらお2人はさっさとはんちよの部屋行つてイチャラブしてらっしゃい。」

ゼルとセルフイがにやけながら意地の悪い言葉をリノア（とスコール）にかけ、ガーデンホールへの入り口へと向かう。

「……………みんなの意地悪……………」

しかし、どんなにからかわれても決してスコールに抱きついた体を離そうとしないリノアに、スコールは苦笑した。

「スコール！お昼まででしょ？じゃ、今日はこのリノアちゃんが特別になにか作ってあげまーす！」

スコールの部屋に帰って来るなり、リノアは水色のニットワンピースの上からエプロンを身にまとい黒曜石のような瞳を輝かせ昼食の用意をし始めた。

しかし、スコールは嬉しそうな表情を欠片も見せず、反対に引きつったような顔をした。

（……………あの料理を……………食べさせられるのか……………）

ベッドの上に腰掛けながら、スコールは手先が不器用なりノアの料理を思い出していた。

前にリノアが珍しくスコールの為にスパゲティを作ったことがあつ

た。

しかし、野菜はボロボロのみじん切り状態、麺はかなり固くおまけに麺と麺が絡み合いすぎて解けない状態、きわめつけがその酷い味だ。

元はただのトマトソースだというのに、なにかが腐ったようなものを食べている感覚になり、体調を崩すかというほどの過激な味だった。

しかも、リノアはどうやら味音痴らしくその酷いスパゲティを「我ながら上出来上出来」と言いながら美味しそうに食べていた。

仕方なくスコールは無理矢理口に押し込んで、次の日スコールは見事に胃をやられて任務を休んだ。

そんな経験があるだけに、余計にリノアの料理が怖い。

しかし、当然作るなどとは言えず、スコールはただただ恐怖の料理を待つしかできなかった。

「できたよー!!」

上機嫌なリノアの声が響き、料理がベッドの前のテーブルに置かれる。

「今日はリノアちゃんオリジナル サンドウィッチでえーっす」

「――……………」

目の前に置かれた、それ。

そして、今のリノアの発言。

(…………絶対、噛み合っていない。)

スコールは断言して良いというまでに思った。

四角い黒焦げたもはや炭と化したパンらしきものに、レタスと卵とハムがはさまっている。

レタスはびりびりに破いた塵のようになっており、卵はドロドロになっ
ていてあまり焼いた様子がなく、唯一まともなハムもパンからは
み出ておりかなり汚らしい。

「ちょっとだけ見た目は悪いんだけどね、味は保証するから食べて
食べて！」

「・・・・・・・・・・あ、・・・・ああ・・・・・・・・・・。」

スコールは額の傷に皺を集め、サンドウィッチなるものを口へ運ん
だ。

その後、約10分はスコールVSサンドウィッチの凄まじい戦闘が
あった。

やっとの思いでサンドウィッチを平らげたスコールは、まだ微かに
苦味を含んだジャリジャリとした炭が口の中に広がり続け、すつか
り気分が悪くなりベッドで横になった。

「ねえスコール？どこか体調でも悪いの？大丈夫？？」

ベッドの横で全く悪気なくリノアがそう言うと、スコールは軽く口
を開いて

「・・・・・・・・大丈夫だ。」

と返した。

「でも、うーん・・・なんか変。あ、なんかデザートでも作るのか??」

リノアのとんでもない提案に、慌てて

「やめてくれ。」

と断わった。

一方のリノアは折角スコールが早く帰って来たのに、体調不良で横になってしまい、なにより自分はなににもできないことにやるせなさを感じていた。

「あたしって、役立たずだね・・・。」

「?」

スコールはいきなり溜め息をつきながら落ちこみ出したりリノアに驚いた。

「スコールが体調壊しても、なんもできないし・・・料理だって見た目あんなだし・・・なんか、あたしってつくづくダメだな、て思っちゃ・・・」

「なんでそうなるんだ。」

途端少し怒った声色でスコールがリノアの言葉を遮った。

「リノアがいてくれてすごく助かってる。リノアがいなければ俺はなにもできないただの弱い人間だ。それなのに、リノアがそんなこと言ったら、俺はどうなるんだ。」

「スコール……。」

「リノアが設立たずなら、俺は設立たず以下のゴミだ。だから……
……リノアは、そんなことを言わなくて良い。少なくとも俺は、
リノアがいてくれるだけで良いんだ。」

自分のせいでリノアが落ちこんでしまった事を反省し、スコールは
そっとリノアの体を抱き上げベッドへ持ってくる。
そして、優しく抱擁する。

「……ありがとう、スコール。」

リノアはこれ以上幸せなことはないといった表情でスコールにより
かかる。

窓から爽やかな風が吹きこみ、2人の髪を揺らす。

陽光が2人を照らしつけ、うつすらと部屋を朱色に染めた。

「……もう夕方か……。早いな。」

いつのまにか2人でうたた寝をしてしまったようで、隣にはリノアが気持ち良さそうに寝息をたてている。

自分の腕まくらにリノアの軽い体重がのり、温もりが伝わってくる。スコールはリノアの幸せそうな寝顔を見て、微かに微笑んだ。

（いつもなら今頃は戦地でライオンハートを振り回している時間だな。）

そう思うと、そんな時間にリノアとこうして2人で過ごしているのが夢のように感じる。

「……うん……スコール……」

体をスコールの方にさらに寄せ、リノアは寝言を言いながらスコールに強く抱きつく。

いつもの綺麗に輝いている黒曜石の目は柔らかく閉じられている。さっきの不快な気持ちたちが嘘のように、スコールは笑みを深め優しくリノアを抱きしめる。

（……これを、安らぎ……と言っのか。）

まさに、その通りだった。

自分がいつも欲しかった時間。

くつろげる、癒される空間。

それは、全てリノアが作ってくれた。

愛しくてたまらない少女。

スコールはそろそろリノアを起こさないといけないと思い、しかし気持ち良さそうな彼女の寝顔に思わず見惚れてしまった。

綺麗、といった表現がよく似合う。

固い理性をも狂わされそうになる程のもの。

『今が……ずっと続いて欲しい』

それはかつて、苦しみの中リノアが言った夢い願い。
しかし、あの頃と今はもう違う。

安らぎという時間がある。

その時間は、今だけではない。
これからもずっとある安らぎ。

（だから、今だけが続けば良いなんてもう思わない。）

今この瞬間を失っても、明日でも、明後日でも。
またこの安らぎは訪れるから。

「リノア、そろそろ夜になる。起きれるか？」

軽くリノアの体を揺らし、起こす。
すると珍しくすんなりとリノアは目を覚ました。

「……あれ……？わたし……寝ちゃってた？」

「ああ。すぐく寝入っていたな。」

言いながらリノアの寝癖を手で弄ぶ。

「あ、寝癖？もーすぐ寝癖ついちゃうんだから……。」

「俺はリノアの寝癖好きだけだな。」

言ったらリノアが頬を赤らめて顔を少し俯かせる反応を知っているスコールはさらに

「寝顔も綺麗だった。」

とわざと追い討ちをかける。

あつという間にリノアは顔が沸騰したお湯のごとく真っ赤になり、湯気が出そうな勢いだった。

「スコールのいじわる・・・。」

そのリノアの反応が可愛くて、スコールはリノアの額に口付けた。

「じゃあ、思った事はなんでも胸にしまい込んでいる方が良いか？」

意地悪にスコールが聞く。

「・・・それは嫌。」

スコールには滅法弱く、リノアは俯き、せまってくるスコールの唇にそつと自分の唇を重ねた。

今だけの幸せ。

明日にはまた、別の幸せがやってくる。

でも、この幸せは今だけのもの。

明日とは少し違う安らぎ、幸せ。

今だけの、幸せ。明日だけの、幸せ。

日常、繰り返す。

「スコール、大好き。」

ずっと、そんな繰り返しが続けば良い。

「知ってる。」

- f i n -

——あとながき——

（後書き）

いやー、甘ったるいですかねー汗

スコールの書き方が甘すぎた感じです……

最近FF8から離れているため、キャラの喋り方が曖昧な気が……
(o、)

普段一緒にいられない2人をほのぼのと書いてみましたw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9266a/>

Only now

2010年10月11日04時43分発行